エボ・モラレス後のボリビア政治経済

島袋 正克

大統領選挙後の政治情勢

ボリビア多民族国家の与党であるMAS党（Movimiento al Socialismo）で絶対的な権力を持っていたフアン・エボ・モラレス・アイマ（Juan Evo Morales Aima）元大統領の影響力が揺らいでいる。

その揺らぎは昨2020年10月に新大統領となったルイス・アルセ・カタコラ（Luis Alberto Arce Catacora）の就任式にエボ・モラレス元大統領が出席できなかったことが予兆であったかもしれないが、それが露わになったのは今年3月の地方選挙においてモラレス元大統領がMAS党の党首として、推薦擁立しようとした各都市の立候補者を同地方のMAS党支持者が拒否して別候補を擁立したことであり、あるいはエル・アルト市のように支持率の高かったモニカ・エバ・コパ（Mónica Eva Copa Murga）をモラレス元大統領が党候補から外したため、彼女の支持者が政治グループ「ハリャリャ」を発足させてエバ・コパ を候補にして圧倒的な投票率でエル・アルト市長に当選させたのが象徴的とも言える。

エル・アルト市はMAS党にとって絶大な支持を得ていた都市であり、モラレス元大統領もその地で選挙の最終演説を行ったことがあるほどMAS党にとっては重要な都市である。その選挙地盤を失ったことは市長選を敗北した以上の大きな意味を持つ。さらにエボ・モラレスの擁立した候補に対抗して立候補したエバ・コパ候補は一時期80%を超える支持を得、マスコミが「エバ現象」という表現さえ使ったほどの人気を博し、最終的には有効票の68.7%という圧倒的な得票で当選を果たした。

モラレス元大統領及びMAS党はエバ・コパが立候補した時点で彼女をMAS党から追放し、様々なスキャンダルを彼女に浴びせかけたが、それさえも一蹴され、効果があったとは思えない。

3月の地方選挙では、大統領選でMASのアルセ・カタコラ候補と競ったサンタクルス出身のフェルナンド・カマチョ氏がサンタクルス知事選に立候補し当選を果たしている。カマチョ氏はサンタクルス県の市民団体Comité Pro Santa Cruzの理事長時代の2019年10月、エボ・モラレス元大統領の当選に不正があったという市民団体の訴えの先頭に立ちモラレス大統領がメキシコに亡命する発端となったサンタクルス市民運動のリーダーとして活躍し、その勢いをもって大統領選にも出馬したが、彼の市民運動が大統領選挙のためのものであったのかという不信感やパートナーの副大統領候補のスキャンダルもあ

写真1：エル・アルト市長に当選したモニカ・エバ・コパ新市長
（写真はいずれも執筆者提供）

写真2：MAS党のシンボルカラーのブルーを身に着けて演説するエボ・モラレス元大統領

り大統領選では惨敗している（余談だが、サンタクルス県は執筆者の故郷、沖縄県と姉妹提携都市を締結している）。

新政権の経済課題

当選したアルセ・カタコラ新大統領は、選挙公約に掲げた裕福税（IGF：Impuesto a las Gran fortunas）を当選後に実行に移した。この新税は3,000万ボリビアーノス（約430万米ドル）以上の資産に対して課税される。税率は1.4～2.4%の累進課税であるが、エコノミストは、この税収による増収と新たな増税によって海外投資が減少することを比較すれば、この新税の効果は期待できないと指摘している。

アルセ・カタコラ新大統領の課題は、天然ガス輸出の減少や対外債務、そして外貨準備高の減少だろう。ボリビアの主たる収入源である天然ガスはモラレス元大統領時代にその収益がポピュリズム的に貧困層に配られた。しかし、モラレス大統領の絶頂期には原油価格80米ドル／バレルを予想して組まれていた国家予算は、一時期は30ドル台まで価格は下がり、それだけではなく新たな油田の採掘に投資しなかったため、採掘量が減少し、当然のことながら輸出は金額数量ともに減少し、ボリビアの外貨準備高減少の原因となっている。

外貨準備高については、2014年に151億2,200万ドルに達したボリビアの外貨準備高（RIN）は、その後減少が続き、ボリビア中央銀行（BCB）のデータによると2021年2月時点では約3分の1の49億6,800万ドルまで保有高は減少しており、また、その準備高の大半は金で保有しており、現在のドル保有高では輸入4か月分余の金額にしか相当せず、今後の輸入決済や対外債務支払いに不安を残している。

写真３：当選したルイス・アルセ・カタコラ大統領（右）とダビッ・チョケワンカ副大統領

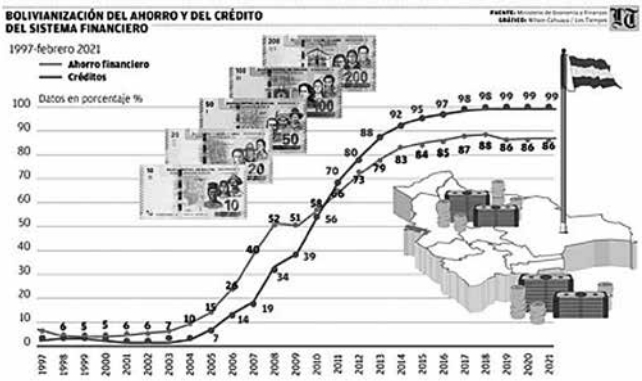
対外債務については、ボリビアの対外債務は2003年から2005年の間は約50億ドルの水準であったが、12年間で5倍に増加し、2007年の22億8,000万ドルから2019年には112億6,800万ドルに増加した。マルセロ・モンテネグロ経済財政大臣は「2020年度ボリビア経済報告書」を発表し、対外債務が増加したことを認め、2021年度に37億1,400万ドルを返済しなければならず、2022年には約20億ドルを支払わなければならないことを認めた。エコノミストは、対外債務は外貨準備高（RIN）を大幅に上回る金額であり危機が発生していると警鐘を鳴らしている。政府は2022年から2023年の間に40億ドル近くを支払わなければならないと認めている。2020年の外債務は121億7,200万ドルで、国内総生産（GDP）の31.7%に相当する。そのためアルセ・カタコラ大統領はアルゼンチンと同様に対外債務の支払いを止め、債権者（国）と交渉すると述べている。

カタコラ政権の隠れたリスクは通貨の切り下げ問題である。エコノミスト、輸出業者はアルゼンチンやブラジル、その他の周辺国同様、自国通貨を切り下げるべきだと政府に進言、陳情しているが、ボリビア中央銀行（BCB）は、その度に「その必要はない」と否定している。しかしドル安は、アルゼンチンやブラジル、そしてペルーなどからの密輸入増加の原因となっている。密輸出者にとってはボリビアでドル決済して自国に持ち込めば、商品売買による利益だけでなく、為替益で二重に儲かるという構図となっている。また、密輸入品の増加はボリビア国内産業にとって大きな障害ともなっている。

モラレス前政権の功罪

現在のところ、アルセ・カタコラ政権の政権運営

表：通貨固定相場後の貯蓄と融資の変化



出所：執筆者提供

はエボ･モラレス政権時代と大きな違いはなく、また、前述の各問題もアルセ・カタコラ政権になって生じた問題ではなく、前政権の負の遺産である。

では、エボ・モラレス元大統領の功罪について意見を申し上げたい。功績でいえば、やはり彼や彼の政党であるMAS党が繰り返し主張している貧困率の減少だろう。そして先住民系民族の意識を高めたことだろうと思われる。しかし､罪過も同様と言える。つまり、貧困率の減少に使われた分、国の収益は投資にまわらず、現在にそのつけを残した。そして、先住民系民族の意識の高まりは、東西の逆差別的断層、つまり「コリャ」と呼ばれるコチャバンバ以西の先住民系と､「カンバ」と呼ばれるサンタクルスを中心とする東の先住民系以外の住民との間に断層を作ってしまった。あるいは、モラレスはその断層を作り出し先住民に認識させることによって大統領になれたともいえる。彼が政権を取る際に繰り返し使われた脱植民地化や米帝国主義というフレーズは、先住民たちに我々は未だに搾取され続けているというイメージを与え、被害者意識を植えつけた。この意識は彼らの中に深く根づいており、また、モラレスの当選によって彼ら先住民は｢我々がマジョリティである」ことに気付いた。これからのボリビアには第二、第三のエボ・モラレスが出現し先住民の意思が政治に大きく影響すると思われる。

大方の予測では、アルセ・カタコラが新大統領に就任してもモラレス元大統領が院政を敷くのであろうと思われていた。しかし、前述のようにモラレス元大統領が擁立した候補ではないMAS党候補の勝利や落選、MAS党を離れたエバ・コパ候補にMAS党候補が敗北するなど、地方選挙結果はモラレスの院政を遠ざけるとまではいかなくとも弱める原因となったと思われる。

また、モラレス時代には外務大臣を務め、今回、新副大統領となったダビッ・チョケワンカ・セスペデス（David Choquehuanca Céspedes）氏はアイマラ族の精神的リーダーであるが､彼は新しい政治リーダー育成を目的にエル・アルト市のサンタローザ地区とサンタクルスのワルネス市に政治家養成学校を発足させ、影響力を増しており、その落成式にはラパスの多くの郡やトゥパック・カタリ農民労働組合連盟などの農民指導者たちが出席し、アルセ・カタコラ大統領も参列したが、エボ・モラレス元大統領の姿はなかった。

それに対抗するようにラモン・キンターナを中心とするモラレス時代の旧閣僚はエボ・モラレスを唯一のMAS党の指導者として位置づけようと、2025年の大統領選の候補とすることを目指して運動を展開しているが、奇妙なことにモラレス元大統領政権時代に大統領以上に発言し、雄弁でもあり、そしてモラレス元大統領と共にメキシコやアルゼンチン亡命に同行したアルバロ・ガルシア・リネラ（Alvaro Marcelo Garcia Linera）元副大統領が沈黙したままである。

両派閥の力量が2025年の大統領選までにどう変化するだろうか。モラレスの大統領復帰への意欲は強いが、これまでと異なり2025年の次回の大統領選挙では選挙以前にモラレスの立候補を容認するかどうかでMAS党内部で大きな亀裂が生まれる可能性が高く、その舞台に立つのはエボ・モラレス元大統領か、ルイス･アルセ現大統領か、あるいはダビッ･チョケワンカが新たなリーダーとなるか。あるいはエバ・コパである可能性もあるが、5年先のことは予測不可能だ。

（しまぶくろ まさかつ　(株) 伊島代表取締役社長
元ボリビア日本商工会議所会頭）